

トラベルライティングを考える

Thinking of Travel Writing

舩谷 鋭*

MASUTANI, Satoshi

Abstract: What is “Travel Writing”? It is a popular phrase in English, but it is difficult to define. Thompson said it includes all non-fiction and fiction travel texts. Japanese “travel writing” is not so clear even now. But if we use the widely accepted meaning, we can critique any kind of tourism studies phenomenon. Some travel writers are very special, such as Mitsuharu Kaneko, Shinya Fujiwara, Jinichi Kuramae and Haruki Murakami. “Travel Writing” is also a teaching method in tourism studies, which also offers Travel Writing Awards. Finally, we can understand “Travel Writing” as compared with “Nature Writing” and their potential applications for Tourism Studies.

Key words: トラベルライティング (Travel Writing), ネイチャーライティング (Nature Writing), エコクリティシズム (Ecocriticism), トラベルライティングアワード (Travel Writing Award), 観光文学研究 (Tourism Literary Studies)

- I トラベルライティングとは何か
- II トラベルライティングの作家たち
- III トラベルライティングと観光教育
- IV トラベルライティングとネイチャーライティング
- V トラベルライティングの可能性

I トラベルライティングとは何か

旅行記や紀行文ということに加え「トラベルライティング」(あるいはトラヴェルライティング)というカタカナ表記を目にすることがある。いずれも、旅をテーマにしたノンフィクションのエッセイ(旅エッセイ)を表すが、『ガリバー旅行記』を挙げるまでもなく、そこにはフィクションが混じることは言うまでもない。もともと“Travel Writing”は英語では一般的な用語で、書

店の棚の分類にもあって、日本の書店の観光・ガイドといった書棚と異なり、それとして受容、消費されていることが見て取れる。

英語では旅のテキストを表すことばとして“travel writing”とともに、“travel literature”“travelogue”“travel book”,そして歴史的な“travel and voyages”などがあるというが(窪田, 2016),一義的な定義は未だ困難だ。あくまで一人称の自伝、回想の一部として考えるとガイドブックは入らないが、下位分類としてガイドばかりでなく、旅の行程、旅テーマのフィクション、回想録、場所の記述、自然の描写、行跡地図、旅テーマのフィルムなどを含める立場もある(Thompson, 2011; 窪田, 2016)。こうした、媒体もノンフィクションかも問わない旅のテキストを最も広く包括的に捉え得る用語が「トラベルライティング」だが、広辞苑はじめ、各種辞書への掲

* 立教大学観光学部・教授

載もないことから、未だ日本語カタカナ語として定着されていないようだ。

一方、トラベルライティングの書き手としての「トラベルライター」について考えると、日本語「トラベルライティング」の側面が明らかになるかもしれない。2008年に翻訳構成されたオニールの『旅行ライター入門講座』(Travel Writing 2nd edition by Peat O'neil, 2006)は「わが国初の本格的トラベルライティングの教科書」と冠された「トラベルライティング」用例のひとつである。著者は旅行ライターに書かれたテキストを旅行文と呼び、それを三つのタイプに分け、最後の旅の文学は「読者を描写した場所へと導く」力を持つと言う。

旅行文には主に三つのタイプがあります。一つ目はガイドブックと旅の方法を解説した本です。二つ目は新聞や雑誌に載った旅行文で、これはある場所やそこに住む人々を事実に基づいて報告するものです。そして、三つ目は旅の文学で、これには場所に関するエッセイや個人的な旅の物語が含まれます(オニール, 2008)。

旅行ライターをトラベルライターと言い換えた場合、1999年に出版された樋口聡の『トラベルライターになる方法』はやはり早い時期の用例だが、

自分の獲得した表現手法を用いて、旅の体験を表現した日から、旅行家はトラベルライターとなる(樋口, 2015)。

と解釈し、包括定義と同じく、トラベルライターの表現として旅エッセイ、ガイドの執筆に限らず、写真、動画、講演を含んでいることは注目されよう。

旅するフリーライターとも称されるトラベルライターと、旅行作家の違いは、日本の出版界では、原稿買い切りのライター、印税の作家と言われるが、頼まれ仕事かライフワークかという自発性の度合いも重要だろう¹⁾。

なお、1970年代初頭に結成され、1999年のピーク時には450人の会員を擁した日本旅行作家協会(JTWO)は「設立宣言」の中で、旅を通した広汎な国際文化活動の展開を謳うが、増大する旅行人口に比して、旅行作家が日本において占める地位は、まことに小さく、かつ貧しいと言う(日本旅行作家協会, 1973)。

II トラベルライティングの作家たち

旅行記には、時系列のストーリーである旅日記と、構成されたプロットである対象描写という二種類の形式が見られる。トラベルライティングの作家として、これまで掲げた文献でしばしば名前が挙がる作家たちを年代順に一覧しておこう。

金子光晴(1895-1975)は詩人だが、1928～32年の旅の後日談とも言うべき、「私事」に終始した『どくろ杯』(1970)、『ねむれ巴里』(1973)、『西ひがし』(1974)三部作と、同じ旅の場所を記録した『マレー蘭印紀行』(1940)の著者として、紀行詩人と呼ばれることさえある。それらは自伝であり、紀行でもあったが、三部作は記憶、『マレー』は記録に拠ったという。光晴の旅をたどった評論家は、紀行作家(トラベルライター)の特徴としてカメラ的な記録を挙げ、

カメラは平等な機械だ。カメラを持ち、現場を踏む私たちは、みなトラベル・ライター紀行作家だ(鈴木, 2003)。

というルビを振っている。

他ならぬ写真家であった藤原新也(1944-)は、1970年代初のデビュー作『印度放浪』(朝日新聞社, 1972)が若者のインド放浪記として、当時大きな影響を与えた。「イスタンブールから高野山」を描いた紀行写真集である『全東洋街道』(集英社, 1981)はユーラシア横断記でもあった。後述するトラベルライティングの評価実践でも難しい問題だが、ライターが文章を書いた場合は文章の著作権はライターに属し、写真の著作権は撮影者に属するという当たり前だが実は混沌が、ライター兼撮影者によって解消されている。

日本でも1970年代末以降にフィクションの脅威となったのはニュージャーナリズム²⁾だが、国内では沢木耕太郎(1947-)によって担われ、特に『深夜特急³⁾』は、藤原同様ユーラシア横断記として、1990年代以後の旅のスタイルや、映像を含むトラベルライティングのモデルになったことはよく知られている。

時を同じくして、本学部兼任講師候補だった蔵前仁一(1956-)が一年におよぶインド放浪を「インド病」、沈没などとともに描いた体験記型の傑作『ゴーゴー・インド』(凱風社, 1986)が出版されている。

日本語「トラベルライティング」が、作家の固有性が低いテキストとして文学性を評価されない傾向がある中、英語圏の読書事情に詳しい村上春樹(1949-)はユーラシア横断作家らとほぼ同世代で、2000年のシドニーオリンピック取材の際、地元紙のインタビューを受け、「トラベルライティング」についてやりとりしているのは数少ない用例だ。

質問「どうしてまたオリンピックの取材(なんか)に来たのか? オリンピックが好きなの?」

回答「どうしてだろう? オリンピック・ゲームそのものに、とくに興味があったわけじゃないんだ。(中略)中には、何かしら書くべきものが含まれているような気がしたのかな。(中略)」
「僕は旅行をして文章を書くのは好きだし、まあ、オリンピック・ゲームつきのトラベル・ライティングみたいなものになるのかもしれないけどね」ということにしておく(村上, 2004)。

春樹は「紀行文集」と題された『ラオスにいったい何があるというんですか?』(以下『ラオス』)のような「頼まれて旅行記を書く仕事」を継続的に行い、前述『シドニー!』含め、自らの旅テキストを「紀行文的な、あるいは海外滞在記的な本」と呼んでいる(村上, 2015)。

『ラオス』から遡ること25年、最初に出版され

た紀行文『遠い太鼓』(講談社, 1990)はヨーロッパでの三年間の生活記録で、旅(海外体験)の意味が次のように述べられる。

外国に行くとしたしかに「世界は広いんだ」という思いをあらたにします。でもそれと同時に「文京区だって(あるいは焼津市だって、旭川市だって)広いんだ」という視点もちゃんとあるわけです。僕はこのどちらも視点としては正しいと思います。そしてこのようなミクロとマクロの視点が一人の人間の中に同時に存在してこそ、より正確でより豊かな世界観を抱くことが可能になるはずだと思うのです。僕が三年かけてこの本を書いたことによってなんとなく体得したのがあるとするれば、それはそのような複合的な目であるような気がします(村上, 1990)。

そして『ラオス』でも変わらず世界を広げるための旅の意義を説いている。

旅っていいものです。疲れることも、がっかりすることもあるけれど、そこには必ず何かがあります。さあ、あなたも腰を上げてどこかに出かけて下さい(村上, 2015)。

また、春樹含め友だち3人で名古屋・熱海・ホノルル・江の島・サハリン・清里ら「ちょっと面白い場所」を踏査した『地球のはぐれ方』で、ノンフィクションの責任に言及している。

この本はいちおう旅行記ではありますが、実用的なガイドブックではありません。情報は正確を期していますが、アップデートまではされておりません。ですから雑誌記事のために現地取材した当時とは既に事情が変わってしまった、というものごとも少なからずあります(村上, 2004)。

すでに春樹の小説の中の主に国内、そして海外少々については評論(鈴木, 2014)として論じられているが、それ以外の、春樹のトラベルライ

ティング、『遠い太鼓』(1990)から『ラオス』(2015)までについては、稿を改めたい。

Ⅲ トラベルライティングと観光教育

春樹を例外として、作家が自作をトラベルライティングと自称する例はあまりないが、そもそも日本の書店にまとまったスペースはなく、ことば自体の知名度もまだ高くはない。そこで、筆者の研究室では、日本で書き手としての固有性が低いトラベルライターを奨励するための研究教育活動を行なっている。「トラベルライティングアワード」(2007-)がそれに当たるが、国内大学の学部生が担う活動のため、主に日本語の機内誌を講読しているが、署名原稿であり、おおむね2000字以上という形式要件を備える作品を掲載しているのはJAL『スカイワード』、ANA『翼の王国』など、自ずとボリュームのある機内誌に絞られる。これらをキャンパスのある新座図書館で購読、製本保存しているが、国内ではJTB旅の図書館以外では機内誌の収集例は少ない。

学生らは毎年1～12月に発行された日本語機内誌・車内誌などに掲載された15誌184編(2018年度)のトラベルライティングを読み、その中から優秀作品を選ぶ。選考基準は「観光学部生が興味深く読める」「読んでみて新鮮な発見がある」「読んだ後そこに行ってみたいと思える」「写真が効果的に利用されている」などだが、プロジェクトメンバーは対象誌から形式要件に当てはまる作品を春学期中かけて講読し、そこから選考基準を参考にロングリストを作成する。それらを10本以内に厳選したショートリストに絞り、ゼミ生全員に読んでもらって一人一票でネット投票し、得票の多い作品が選ばれる。特別な個人による選出でなく、集団で工数をかける方法を取っているが、教育効果はもちろん、実際選考された作品も優れたものが多く、後に書籍に再録されたり、他の賞を取るケースがあった。繰り返し選ばれるライターも出てきたので、近年は受賞者を大学に招き、年末に表彰を兼ねた発表会を開催している。こうした活動にかかわらず、まだまだ出版業界で「トラベルライティング」のステータスが低いイメー

ジは拭えない。しかし、開始当初は収集できる機内誌は限られていたが、年を追うごとに寄贈される機内誌も増えている。『旅行新聞』や『交通新聞』などの観光業界紙で毎年取り上げてもらえるようになり、年末の発表時期は検索トレンドも伸びていることがわかる。

これらは主にトラベルライティングを読む活動だったが、第十回(2016年度)からは学生奨励賞を加え、学部専門科目「トラベルライティング」の授業内レポートを選抜し、最後は大学教員やアワード受賞ライターらによる選考委員会が選考した書く活動の奨励機会を設けている。2017年度からは、キャンパス所在地の新座市とともに、普段気に留めない地元新座を描いた小品を執筆、応募、選抜し、最後は新座市長、教育長、産業観光協会会長らによる選考委員会を選出する「トラベルライティング新座賞」を設け、候補作品の選抜や運営はすべて学部生が当たっている。

トラベルライティングアワード受賞作
2007年(第一回)

野地 秩嘉

『SKYWARD』 2006年9月号掲載

「メルボルン 南の古都の静かな好意」

2008年(第二回)

山口 湖葉(山口 あゆみ)

『SKYWARD』 2007年10月号掲載

「ギリシャ サントリーニ島 眩しい光
静かな余韻」

※『エーゲ海の小さなホテル』日本書籍, 2008
年所収

2009年(第三回)

野村 友里

『翼の王国』 2008年5月号掲載

「FRUITS TRIP IN TAIWAN」

2010年(第四回)

岡田 真由美

『翼の王国』 2009年9月号掲載

「リスボン祝祭紀行」

※在日ヨーロッパ観光委員会主催「第3回 ヨーロッパ・メディア・アワード」雑誌部門グランプリ受賞（2009年）

2011年（第五回）

児島 雄一

『SKYWARD』 2010年12月号掲載

「アラスカ 冬のアラスカ, 王道プラン」

2012年（第六回）

岡田 カーヤ（岡田 真由美）

『翼の王国』 2011年9月号掲載

「フランス・ボルドー地方 ワイン畑を走る」

※受賞二回目

2013年（第七回）

吉田 直子

『翼の王国』 2012年5月号掲載

「ポルトガル・ナザレ

7枚のスカートと1001のバカリヤウ物語」

2014年（第八回）

村岡俊也

『翼の王国』 2013年2月号掲載

「ヨセミテの短い秋」

2015年（第九回）

吉田直子

『翼の王国』 2014年1月号掲載

「南の国の鍋事情」

※受賞二回目

2016年（第十回）

nakaban

『翼の王国』 2015年9月号掲載

「Colours in MELAKA

マラッカ色彩憶え描きの旅」

2017年（第十一回）

しまおまほ

『翼の王国』 2016年3月号掲載

「京の裏路地はよくしゃべる」

2018年（第十二回）

柏木光大郎

『翼の王国』 2017年2月号記載

「トイ・トレインが行く！」

Ⅳ トラベルライティングと ネイチャーライティング

独歩『武蔵野』（1901）など日本の自然主義文学は、18～19世紀ヨーロッパのロマン主義受容とともに、その自然傾斜や生命主義から近代化を実現し、むしろ近代と自然の問題は不可分で、文学は自然に関心を寄せるべきものだった。20世紀後半以降アメリカ発で「地球環境」への関心とともに立ち現れた「ネイチャーライティング」は実は新しく古いものかもしれない。それは自然観光によっても生成され、トラベルライティングの有力な一分野であり、文学研究においてはトラベルライティングを超越するジャンルと指摘される。たとえば、野田は人間世界の出来事と自然現象のあいだのつながりや関係を「交感」と呼び、そうした状態こそがネイチャーライティングのテーマだと言う（野田，2003）。ネイチャーライティングを「自然について語る旅テキスト」とすれば、トラベルライティングのジャンルの一つとも言えよう。

ネイチャーライティングは環境文学（エコクリティシズム）の一ジャンルでもあり、自然と人間の関係を描いた一人称のノンフィクションを言う。その背景には人間中心主義の再考という大きな問題が横たわっている。OEDによると、19世紀以前は“natural history”，20世紀初から“nature writing”が使われ、日本では1993年の文芸誌特集で「ネイチャーライティング」が使われ始めたという（野田，2003）。ネイチャーライティングは自然の知識、自然への感応、哲学的考察の三つの特徴が挙げられ、自然への読者の関心とエコロジカルな目覚めが意義とされる（ライアン，2000）。

以上、ネイチャーライティングをエコクリティシズムの立場から解釈したが、ノンフィクション、一人称、自然観察と文明批評、参与観察、自然との交感などの要素を列挙するまでもなく、トラベ

ルライティングの定義との重なりは少なくない。

芭蕉(奥の細道)と同時代の17世紀半ばのウォルトン(釣魚大全)から18世紀末のコールリッジ、ワーズワースらのロマン主義者、19世紀以降は鈴木牧之(北越雪譜)、ネイチャーライティングの源流ソロー(森の生活)と同時代のメルヴィル(白鯨)、ダーウィン(種の起源)、そしてトウェイン(ハックルベリーフィン)、バード(日本奥地紀行)、20世紀以降は前述の独歩(武蔵野)、熊楠(十二支考)、賢治(注文の多い料理店)ら、第二次世界大戦前までに限っても、ネイチャーライティングは内外の移動のテキストを数多く含んでいるのがわかる(文学・環境学会、2000)。

V 「トラベルライティング」の可能性

トラベルライティングをネイチャーライティングとの比較から検討したが、フランス文学者、畑浩一郎によると、1830年代フランスでは、アシェット社のガイドシリーズ『ギド・ブルー』の前身『ギド・ジョアンヌ』は、ほぼ紀行文による現地情報提供だったという(畑談、2019)。こうした、旅行ガイドがトラベルライティングだった時代は、フランスに限らず江戸時代の道中記でも見られる初期段階だ(神崎、2004)。

一方、2018年のチャート上位、DA PUMP「U.S.A.」は、包括定義によるとトラベルライティングの一つに数えられるような内容を有している。楽曲や振り付けとは別に、その歌詞は旅のテキストとして読むことができ、戦後日本人の欧米観や大衆観光史が、今さら顔をのぞかせることは驚きだ。

「U.S.A.」(日本語歌詞: shungo.)

U.S.A.

オールドムービー観たシネマ

U.S.A.

リーゼントヘア真似した

U.S.A.

FM 聴いてた渚

U.S.A.

リズムが衝撃だった

(中略)

パシフィック・オーシャン一飛び

ハートはいつもファーストクラス

夢というグラス交わし

Love & Peace 誓うのさ

カーモンベイビー アメリカ

サクセスの味方 Organizer

カーモンベイビー アメリカ

ニューウェーブ寄せる ウェストコースト

カーモンベイビー アメリカ

どっちかの夜は昼間

(後略)

メディア研究者の増田聡はこうした歌詞を「呑気でノスタルジックなアメリカ」として、日本における同種の事象としてディズニールランドとハリウッド映画を例示している⁴⁾。作詞(訳詞)者によると、原曲は1990年代のイタリアポップスで、「アメリカ」を恋人に見立てて誘う内容だった。日本語詞は原曲とところどころ韻を踏みながら60~70年代の米国に憧れる少年のイメージで書かれたという⁵⁾。

こうした一周まわったレトロはコンテキストを失った際には違和感しか感じられないが、ディズニールランドをアメリカ発の大衆観光として同列に無意味と言い切れるか。「トラベルライティング」という見立ては、観光事象の分析に新たな視座を提供する可能性を持っている。

注

- 1) 本学兼任講師の前川健一(1952-)のように、あえて「ライター」を自称する例もある。
- 2) アメリカで1960年代にトム・ウルフ(1930-2018)らに唱導された、旧来のジャーナリストに対抗した、細かい描写、会話、三人称、日常の記録からなるノンフィクション作品。
- 3) 外国人受刑者の脱獄、を意味する。
- 4) ポップスみおつくし カモンベイビーアメリカ 反復は不安紛らわす呪文か。朝日新聞 2018年11月26日
- 5) (ひと) shungo.さん DA PUMPの大ヒット曲「U.S.A.」を作詞した。朝日新聞 2018年12月31日

文 献

- 赤坂憲雄 (2018) : 武蔵野を読む, 岩波書店
- 文学・環境学会編 (2000) : たのしく読めるネイチャーライティング—作品ガイド120, ミネルヴァ書房
- 藤原新也 (1982-1998) : 藤原新也コレクション, 朝日芸文庫
- 岳真也 (2006) : 上手な旅行記の書き方, 心交社
- 樋口聡 (1999) : トラベルライターになる方法, 青弓社
- 樋口聡 (2015-2016) : トラベルライターになる方法—改訂電子版, Kindle
- 神崎宣武 (2004) : 江戸の旅文化, 岩波書店
- 窪田憲子ら編著 (2016) : 旅にとり憑かれたイギリス人—トラヴェルライティングを読む, ミネルヴァ書房
- 蔵前仁一 (1986) : ゴーゴー・インド, 凱風社
- トーマス・ライアン (2000) : この比類なき土地—アメリカン・ネイチャーライティング小史, 英宝社
- 前川健一 (2003) : 旅行記でめぐる世界, 文藝春秋
- 舛谷鋭 (2011) : 環境文学と観光のまなざし: ボルネオの「秘密の花園」, 環境という視座: 日本文学とエコクリティシズム (アジア遊学143)
- 舛谷鋭 (2017) : 観光文学研究とエコクリティシズム, 立教大学観光学部紀要19
- 舛谷鋭 (2019) : “観光を学ぶ” ということ—ゼミを通してみる大学の今2, 観光文化241
- 村上春樹 (2004) : シドニー! ①②, 文藝春秋
- 村上春樹ら著 (2004) : 東京するめクラブ 地球のはぐれ方, 文藝春秋
- 村上春樹 (2015) : ラオスにいったい何があるというんですか? 紀行文集, 文藝春秋
- 日本旅行作家協会 (1973) : 日本旅行作家協会設立宣言, <http://www.jtwo.net/Purposeandhistory-j.htm> (2018年12月10日アクセス)
- 野田研一 (2003) : 交感と表象—ネイチャーライティングとは何か, 松柏社
- 野田研一 (2007) : 自然を感じるこころ—ネイチャーライティング入門, 筑摩書房
- 野田研一 (2016) : 失われるのは, ほくらのほうだ—自然・沈黙・他者, 水声社
- ピート・オニール (2008) : 旅行ライター入門講座—旅行ライターとして旅立ちたい あなたへ—, パベルプレス
- 沢木耕太郎 (2002-2004) : 沢木耕太郎ノンフィクション, 文藝春秋
- 鈴木和成 (2003) : 金子光晴, ランボーと会う—マレー・ジャワ紀行, 弘文堂
- 鈴木和成 (2014) : 紀行せよ, と村上春樹は言う, 未来社
- Thompson, Carl (2011): Travel Writing, Routledge